

# SHOW HEY シネマールーム



Data
監督：行定勲
原作：中谷まゆみ
脚本：伊藤ちひろ
出演：豊川悦司 / 薬師丸ひろ子 / 水川あさみ / 濱田岳 / 井川遥 / 城田優 / 石橋蓮司

## 👁️👁️ みどころ

タイトルに思わずドキリ！さだまさしの『関白宣言』を連想しながら、くり返しそれを口にした人も多いのでは？前半展開される豊川悦司と薬師丸ひろ子の軽妙な会話劇とスレ違いぶりに、思わずニコニコ。しかし、M・ナイト・シャマラン監督並み(?)の展開をみせる後半は、きっと涙がポロポロ。

オカマ役がハマリ役の石橋蓮司と妊娠騒動の張本人水川あさみらの熱演を受け、後半にみる夫婦の行き着く先は？

\* \* \* \* \*

## その趣旨や良し！文句なしの星5つ！

本作は2002年に中谷まゆみ原作の舞台劇を行定勲監督が映画化したものだが、プレスシートには「今の日本映画の大半が10代、20代を主人公にした若年層に向けた映画で成り立っています。一方、ヨーロッパやハリウッドを見てみると、40代、50代が主演の映画が多いんですね。僕も40歳を超えて、自分と同じ世代を主人公にした映画を、自分と同じ世代の俳優さん達と一緒に作りたい、大人の映画を作りたいと数年前から考えるようになりました。そうした作品を撮ることは、僕にとっては実験であり冒険でもありましたが、ずっとやりたかったことの一步が、この作品で踏み出せたと思っています。」と書かれている。その趣旨や良し！

年間300本以上観ている私だが、さすがに『クローズ ZERO』(07年)、『ROOKIES -卒業-』(09年)、『ごくせん THE MOVIE』(09年)などの学園モノ(?)や『恋空』(07年)、『Dear Friends ディア フレンズ』(07年)、『赤い糸』(08年)などのケータイ小説モノはノーサンキュー。もっとも、本作については前評判を全く知らないまま、豊川悦司演ずるダメなカメラマン北見俊介と薬師丸ひろ

子演ずる妻・さくらのウェルメイドな物語というだけの予備知識で試写室に行ったが、これが予想以上の大正解。こりゃ文句なしの星5つ！

まず、すばらしいのはそのタイトル。これを見て思わず自分の奥さんを思い出し、それを3～4度くり返した人も多いのでは。もちろん私もその一人・・・。

## 『関白宣言』と『関白失脚』を連想

本作の主人公北見はロクにカメラマンとしての仕事もせず、ぐうたらな生活を送っている様子。本作はもともと舞台劇だから、映画でも舞台となるのはそのほとんどが北見の自宅を兼ねたアトリエだが、まずは2階まで吹き抜けになっているその豪華さに注目。これを見れば、北見はかつてグラビアアイドルの写真撮影などでかなり売れっ子になっていた一流カメラマンだということがわかる。もっとも、アトリエのソファーの上でうたた寝をしている北見の周りは散らかし放題。優しくて出来のいい妻さくらがいながら、これは一体なぜ？

それはともかく、あなたは『今度は愛妻家』という本作のタイトルから何を連想？タイトルだけではイメージが湧かないかもしれないが、鑑賞後はきっとさだまさしの1979年の名曲『関白宣言』と、そのアンサーソングとして1994年に発売された『関白失脚』を連想するのでは？『関白宣言』の歌詞は女性差別、男尊女卑の思想だというナンセンスな抗議もあったが、コミカルな中にも涙を誘う美しい旋律と歌詞が私は大好き。大きく受けたのは「俺は浮気はしない」に続く、「ま、ちょっと覚悟はしておけ」という歌詞だが、私はラストの「忘れてくれるな 俺の愛する女は 愛する女は 生涯お前ただ一人」が一番好き。だって、これがこの歌の本音なのだから。「関白宣言」と「関白失脚」からみるそんなダメ男の妻に対する本音は、まさに本作とピッタリ一致？

## 職場兼自宅で若い女と？

北見とさくらの会話によれば、10年間の結婚生活の中でさくらが知っているだけでも北見の浮気は10件あるらしい。もちろん北見はそれをすべて否認だが、さくらが知らないものを含めれば、その数は倍増？女優志願の女性・蘭子（水川あさみ）から「これから行きます」との連絡をケータイで受けたことによって、俄然目覚めた北見の頭の中は超高速回転。これから友達と箱根に旅行に出かけるという妻と鉢合わせにならないよう蘭子に指示した結果、うまく蘭子との2人の時間をもつことに成功。

今ドキの女優志願の若い女の子は割り切りが早い。したがって、北見のような有名なカメラマンにオーディション用の写真を撮ってもらえれば、書類審査は合格確実。そう納得すれば、タダで撮ってもらうことの見返りは最初から折り込み済み？ところが、どうもこのカメラマンはもっと上手だ。つまり、職業上優位な立場を利用してエッチに及んだなどと後日文句を言われぬよう、何ともクサイ芝居を。その結果、義理にもとづくエッチではなく、愛情にもとづくエッチを実現しようとしたが、何とそこに戻ってきたのがさくら。シャワーは故障しているなどと、ワケのわからない言い訳をしても玄関に女の靴があるのだから北見の嘘はミエミエ。

職場兼自宅で若い女とイチャイチャするのはもってのほかだが、なぜタイミングよくさくらはそんなところに戻ってくるの？

## 石橋蓮司のオカマ役はハマリ役？

1941年生まれの石橋蓮司は強面のヤクザ役から温厚なおじいちゃん役まで何でもこなす貴重な脇役だが、オカマ役は本作がはじめて？そう思うのだが、「北見ちゃん！」と呼びかけながらアトリエに入ってくるオカマのおっさん文太はかなりのハマリ役。

前半の彼の見せ場は、北見の助手・誠（濱田岳）といふ仲になった蘭子とのバトル。「オカマは嫌い！」と言い放つ蘭子と、「私も女は大嫌い！」と反撃する文太の価値観は正反対だから、以降2人は永久に没交渉。誰でもそう思うはずだが、実は後半文太も蘭子も北見のアトリエに何度も登場し、大切な役割を演ずることに。ちなみにオカマバーを経営している文太がオカマであることをカミングアウトしたのは、何と妻と子供ができた後らしい。つまり、その年になってやっと彼はオカマとして生きていくと決心をし、妻子を捨てたわけだが、それはそれで罪つくり？その影響は全くないの？



レンタル開始日:2010年7月9日(金)

## 水川あさみもすばらしい演技を

中盤に、なぜそんな文太の告白が登場？それは蘭子の妊娠騒動のためだが、さてそこか

らどんな波乱が？そもそも蘭子の妊娠ってホント？ホントだとして、その父親は誰？ホントに一度エッチしただけの誠？蘭子が勢い込んで誠を訪ねてきたのは、誠から当面の処置費用を借りるためだけ？そんな蘭子に対する誠と文太の反応は？

『深紅』（05年）での内山理名との揃い踏みが新鮮だった若手美人女優水川あさみ（『シネマルーム8』304頁参照）が、傷つきやすい心をもった頑張り屋の今風の女蘭子を熱演している。なお、オーディショントップ合格の報告にきた蘭子によって、後半にもその騒動の延長戦が展開されるから、それもお楽しみに。

## 前半ニコニコ、後半ポロポロ！

トヨエツこと豊川悦司の芸達者ぶりは当然だが、本作を観ていると『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した薬師丸ひろ子はホントにいい女優に成長したものだと感じ。

前半展開される、北見とさくら夫婦のスレ違いはかなり顕著。これはきっとあなたの夫婦生活にも共通するのでは？もともと2人の趣味は全く異なり、さくらが健康おたくなら北見は宇宙人の置物や昆虫のマグネット集めなど、まるでガキ。しかも常に煙草スパスパ状態で、健康のためにさくらが作る人参茶などには完全な拒否反応。もっとも、「俺の健康なんかお前に関係ねえだろ」とは、ちょっと言い過ぎでは？

こんな風に本作の前半約1時間20分は北見とさくらの会話劇を中心とし、そこに蘭子と誠、文太を含めたさまざまなドタバタ劇が展開されるからすごく面白い。ところが笑いを誘うそんなドタバタ劇が後半は一転し、あなたの目はきっと涙ポロポロ状態になるはずだから、さあお立ち会い！

## M・ナイト・シャマラン監督も真っ青？

前半のコミカルな展開に対して、後半は涙ポロポロ。それは一体なぜ？それをここで明かすことができないのは当然だ。そこで少し別の視点から書けば、あなたはM・ナイト・シャマラン監督の作品が好き？『シックス・センス』（99年）は世界的に大反響を呼んだが、その後の『アンブレイカブル』（00年）『サイン』（02年）『ヴェレージ』（04年）『レディ・イン・ザ・ウォーター』（06年）『ハプニング』（08年）には少しずつ飽きか？それは、観客を驚かそうという映画づくりの意図があまりにミエミエだから？

映画は作り物だから、客を驚かせたり、笑わせたり感動させるのに、どんな仕込みも騙しも許される。しかし、それがあまりミエミエだと、逆に観客は白けてくるもの。『シックス・センス』が爆発的人気を呼んだのは、観客がM・ナイト・シャマラン監督が仕掛けたワナにいつ気付くかが話題となったためだが、それはホントは邪道？作品の出来は、映画を観て感動できるかどうかで判定しなければ。その点きっと本作は、M・ナイト・シャマラン監督も真っ青の感動作！

2009（平成21）年11月12日記



## 「今度は愛妻家」

(1月16日、梅田ブルク7ほかで公開)



©2009「今度は愛妻家」製作委員会

# 前半ニヤニヤ、後半ポロポロ！

トコエツと豊川悦司は、何をやらせてもウマいが、

さだまさしの「関白宣言」のような男は一番のハマリ

役？ 愛妻さくら(栗師丸ひろ子)と行った沖繩への

のズレ違いは顕著だが「俺の健康なんかお前に関係ね

子づくり旅行から1年。今や仕事もせず、ぐうたらな毎日を送るかつての死れっ子写真家北見の姿を見るとそう痛感。  
「子供をつくる気がないなら別れて」とさくらは深刻だが、北見は妻の旅行中に女優志願の蘭子(水川あさみ)とイチャつく有り様だ。現場を抑えられるとあっさり観念したが、ひょっとしてさくらの目は千里眼？「亭主元気で留守がいい」は奥様族共通の格言だが、それは旅行から帰ってこないさくらと北見にも妥当？

前半の会話劇に見る夫婦

えたる「はちよ」と言い過ぎ。これでは「好きな人ができたの」と妻からの離婚申し出も当然だ。中盤以降は蘭子の妊娠騒動がドタバタ的な笑いを誘うが、キーマンになるのは右橋連司の怪演がキマる世話好きのオカマ文太。彼がオカマを公表し妻を捨てたのは非つくりだが、その影響は今どこに？

せがむ妻に対して久しぶりがカメラを向けた北見がレンズ越しに見たものとは？  
「関白宣言」がアンサーソング「関白失脚」で完結したように、北見の「浮気もやめる。子供もつくる。これからはお前の言うことを何でも聞く」という心の叫びは感動的だ。人は愛するものを失ってはじめて気付くもの。そんなテーマを舞台劇のような感覚で感動的に描いた本作に5重丸！

2007年11月9日から開始したこの連載は、今回でいったん終了します。今後も「弁護士」の目でみる映画評論家」という特質を活かして、新たな企画でお目に掛かりたいと思います。2年間、「愛読ありがとうございます」でした。(おわり)